みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

「ストリートの人類学」の目標と射程：序論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関根, 康正 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001223

序　論

「ストリートの人類学」の目標と射程

関根康正編『ストリートの人類学』上巻
国立民族学博物館調査報告　80:15−18（2009）

序　　論

関根　康正
日本女子大学

人類学は人間という存在に肉薄しているだろうか。人間の近代理性を超えたその全貌が知りたいのである。それが人類学の欲深い希求である。それには正確な歴史人類学が必要だ。これは現在学としての人類学にとっては一見困った事態である。しかし突破の道はないか，自問してみる。現在学のなかに「歴史」を見いだすことは不可能かどうか。すぐに『構造人類学』におけるレヴィ＝ストロースの歴史概念をめぐる議論が思い起こされる。歴史が未開から文明への歩みを辿っているのだとしたら，歴史を現在の人間の足下に発見することは不可能ではないのではないか。レヴィ＝ストロースの構造主義人類学がそれを試みたことは間違いない。私は，それを「ストリートの人類学」で試みたいと思った。表層の近代理性を突き破り，差し戻し，理性の立ち上がる根っこの脱理性の場所（反理性や非理性ではない）を見定めたいと思う。

近代が全体的人間を隠したということはすでに幾多の言説があるし，近代人としての自分の生活実感としても日々感じている。

例を挙げよう。人食い慣行と首狩り慣行は，いまだ適切な人類学的把握がなされたとは思われない。人が人を殺し，人が人を食うことが，人間の文化の名において広く深く行われてきたことがうまく了解できないのである。人食いについて，春日直樹が最近「ユートピアの重さ，ポスト・ユートピアの心地よさ」（石塚道子，田沼幸子，冨山一郎編 2008『ポスト・ユートピアの人類学』人文書院）という論考において，人類学者は宣教師に負けていないかと，率直にそのことを指摘しているし，首狩りについては，私自身がボルネオのイバン人の村を最初のフィールドワークの地にした関係で，以前から解けない難問として心に蟠っている。

話を一挙に抽象化するならば，彼岸を含む人類学が正確に構築されていないのである。そうだとしたら，人類学は道半ばということではないか。

「ストリートの人類学」はこの「彼岸を含む人類学」を希求する1プロジェクトである。私自身の研究の歩みから述べれば，〈ケガレから都市の歩道へ〉というエッジを縫う形で試みられてきたものの延長上にある。

今回の民博共同研究「ストリートの人類学」の前身に，民博共同研究「〈都市的なるもの〉とは何か」というプロジェクトがあり，その成果として『〈都市的なるもの〉の現在』が刊行された。その出版を機に『UP』誌上に「ケガレから都市の歩道へ――『〈都市的なるもの〉の現在：文化人類学的考察』を編んだ後で」と題するエッセイを寄せた。南アジア社会でケガレを論じてきた私が，どのように「ストリートの人類学」という

テーマにたどり着いたかを知っていただくために，『UP』誌上掲載文ではなく，その倍の分量であった刈り込まれる前の原版をここに示すことにした。これが第１章である。

その後に，本プロジェクト「ストリートの人類学」が何を目指す研究であるかの問題提起と展望をまとめたのが第２章である。〈「ストリートの人類学」の提唱〉ということで，そのことが示される。

序論の内容に入る前に，この冒頭部分において本書の構成を簡単に述べておきたい。長い道行の指針になればと考える。

序論では，なぜ，今，ストリートという空間的概念を人類学的研究の対象に据えるかという問題提起を行う。そこでは，編者の拙著『ケガレの人類学』で提唱した「ケガレ」と「不浄」とのイデオロギー的区別を中核にしたケガレ論の理論的展望を現代社会の現実に対峙するために敷衍した延長上に，ストリートの人類学が位置づくことの必然性を説明する。その目指す方向は，再帰的近代化段階において偏った動向を惹起しているネオリベラリズムを批判し，それを軌道修正し適正化していくための思考の鍛錬にある。そこに向けて，都市の境界的な場としてストリートを対象化することの意義と可能性を説明している。

第１部では，ストリートを描出するエスノグラフィーの方法を，これまでの都市の空間研究をレビューすることを通じて虫の眼の「歩く者」と鳥の眼の「見る者」との両方にわたる視座から概観し，そうした土台の上に，本書での人類学的視角を位置づけるための基礎作業がなされる。特に，都市空間とはストリートの束であるとの認識から，都市ストリートをミクロな視点からマクロな視点までカバーしてきた地理学的想像力の蓄積を踏まえ，とりわけ時間・空間の境界線をジグザグに「遊歩」するフラヌールの視線のあり方という精神分析的想像力ないしは現象学的交感を重視してストリートを都市空間の無意識ないし他者の襞に分け入る兆候の場として把握する。これらは，人類学的ストリート研究の方法を深化させるための基礎作業である。なぜなら，オイディプス的精神分析学以上に，自己の意識世界を柔軟に把握し直し，それを超え出ようとするところに人類学の真髄があるからである。都市という権力空間の中にあってストリートは，そうした人類学的契機と共振することになるヘテロトピアの時空が現れては消える動態を相対的に明示的な形で私たちの目に見せてくれる。そこでは，社会権力の拘束のうちに自由を感知し開拓するという実践感覚をただちに要求される。そこのところが，対象と方法の両方の意味において人類学的営為が共鳴する場となる理由なのである。ストリートの人類学は，対象としてのストリートを人類学という学的方法によって研究するという対象と方法とを切り分けた見方にとどまるはずがない。「ストリートする」すなわち方法において「ストリートに出る」ことにおいて達成される。

第２部は，今述べた意味でのストリート・エスノグラフィーの実践の集積である。ストリートを生きること，これは意識の勝ったホームの視点や知恵では把握しにくく対処

しにくい場所を生きることであり，それは単にアンチ（反）・ホームでもなく，むしろ二項対立的思考を超える脱ホームの知と力の広義の生産力が，多様な文脈で掘り起こされ描出される。編者が別の場所で〈「周辺」を「境界」に読み替える〉と言った事態の具体相が次々に明らかになる。どれも微妙で繊細であることが特徴であり，目線を地に近づけて現実に接近しようとしている。ストリートが教えることは簡単ではない。負の世界に反権力・反転した希望・創造力をユートピア的に想像してはいけないことを教えるし，だからと言って，ホーム的意識の規定するマイナス世界でもない。そこはやはり，フーコーの言ったヘテロトピアという容易ならざる概念を持ち出したくなる境界的で微妙な，実は私たちの生の実相を教示している場ではないか。ストリートは複雑な相貌でホームにUターンしてくるもののようである。そうなのである。外に見えていたものが，実に私たちの生活場自体において生きられていたことに迂回して気づく経験である。むしろ問いは，ここでなぜこれほどまでにホームとストリートが乖離切断されるようになってきたのか，そういうことをもたらした近代性の内実に迫る必要を明確に教えてくれることになる。その問いは，近代の近代化，すなわち再帰的近代化と規定される現代社会の在り方，その中でも偏ったネオリベラリズムの疾走へと目を向けることの必然の道を拓く。したがって，第3部の議論へのつながりの意味も含めて，この第2部が本書で示す研究成果の基礎的中心に位置することを強調しておきたい。ストリートという対象との交わりが，自己の方法的視座（見方）の変容という事態を引き起こす経験として各章は読まれる必要がある。研究者自身がそれぞれのやり方で「ストリートに出る」試みを行ってみた結果である。その〈周辺〉への接近と，さらにその場所の〈境界〉への読み替えが，現代社会の中枢的問題に迫るときに不可欠であることの根拠や論拠を示してくれている。

第3部は，第2部のストリートの経験論をバネにして，それを時間的（歴史的）に，空間的（地理的）に延長できることを実験的に考察し，ネオリベラリズム問題に根本的に立ち向かうための準備を試みた挑戦的な部分である。ストリート概念とローカルな生活場から論じるトランスナショナリズム概念とを実験的精神でメタフォリカルに結合させてみることで明らかになってくる事態を活写したかったのである。再度ここで，〈「周辺」を「境界」に読み替える〉必要性に迫るスケールの大きな諸事例を提供できたと考える。この部分は今後に課題を多く残すものの，少なくとも，グローバリゼーションに翻弄されるローカリティの位置をストリートに重ね合わせてみながら考察する価値は十分にあることは展望できた。そのために，ストリートを見る微妙さをもってローカリティの境界的実態を精査しなければならないことを確認した。ローカリティもまたストリートと同様に権力の刃先で変転を尋問されている。自らが進んで自らを打ち負かすことも当然起こっている。その事態を正確に把握・測定しなければならない。ローカリティ一般にとどまらず，〈勝利するローカリティ〉に対して〈敗北したローカリティ〉

という仮説的な概念を腑分けし設定してまでも隠蔽された現実を掘り起こす試みをする必要は，そのためである。

結論と展望では，以上の論証を踏まえて，ネオリベラリズムへの対抗の作法を，注意深く，しかしかなり大胆に探っている。ストリートとローカリティは，後背地論，「生活の場」論，平滑空間論として展開され，反芻され，〈ストリートの人類学〉の輪郭や射程を提示することになる。それは，地球を無人の荒地にしてもかまわないかのように（オイディプス・コンプレックスのルサンチマンのように）疾走するネオリベラリズムの行方不明から，少しでも他者とともに自らが救済される実践論へ向けた原論が主張される。ここで言う実践論とは応用人類学的意味のそれではない。そうではなく，ストリート・エスノグラフィーの描写実践がそのままで他者了解と自己変容という人類学的実践となっていることを明示したかったのである。そう主張するのは，対象と方法が重ねあわされていくと述べたように，実践とは，認識内容の応用ではなく，自他が浸透しあう認識的かつ情動的行為（編者はこれを了解と呼ぶ）の効果としての視点変更・態度変更のことであるから。これは微妙で繊細で，自他の分割も不分明な共振領域で起こる出来事なのであろう。その情念をも巻き込む他者の了解は自ら自他を救済する行為を生み出すことになる。その点をはずした，いわゆる意識の勝った実践は必ずや抑圧性を露わにしてくることになり，他者を不幸に陥れていく。狭義の認識知や理論から自然な行為は起こらない。このような基本原理を無視した人類学の実学化は，ストリートの人類学が問題視しているところの粗野な研究姿勢というものである。それはネオリベラリズムの粗野さと同類のものに思われるのだが，そうではないだろうか。